月刊
立川と語ろう　立川に生きよう
えくてびあん
10
〈EKUTEBIAN VOL.17 OCTOBER 1998〉
まい あーと■ 陶芸「けんかのあとは…。」by 可部美智子

たちかわの石仏たち⑧

若葉町の『出羽三山供養塔』

昔は砂川前新田と言われていた若葉町の五日市街道沿いに、立川ではただ一基の出羽三山供養塔が立っています。

出羽三山と言うのは山形県の中央部にある「羽黒山」「月山」「湯殿山」のことで、日本古来の山岳信仰であり修験道の山伏が修験者として各地に普及させた信仰です。

この塔が建てられたのは、今から百七十年余り前の文政九年（一八二六）。正面台座に、遠く山形県出羽三山までお参りに行ったと思われる九名の当村錫杖講中の名と、左右の側面には砂川村名主砂川源五右衛門を始め、十六人の世話人の名が刻まれています。この世話人の中には周辺の新田村落からも加わっており、かなり広い範囲で信仰されていたようです。

それにしても山形県までの遠い道程を、徒歩でお参りに行った当時の人達の信仰心には頭が下がります。

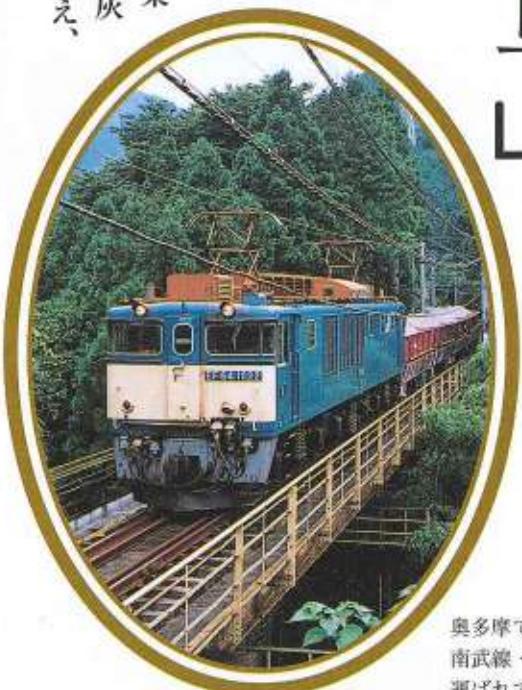
立川民俗の会　豊泉喜一・談

●所在地：若葉町3-52　五日市街道沿い
●建立：文政9年（1826年）

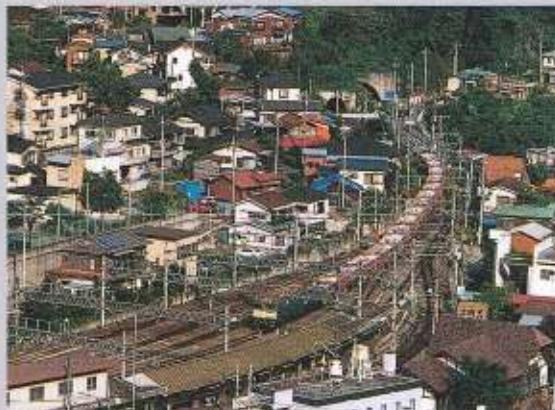
消え去った青梅線「石灰石列車」

最後の日、富士見町にて。当たり前だったこの風景も今日で見納め。

そもそも青梅線とは、奥多摩で採掘された「石灰石」を運ぶために敷設された鉄道だという。明治の半ばから、日本の近代産業を担ったこの貨物列車、通称「石灰石列車」が、百年以上の活躍を終え、この夏ついに姿を消した。

情報と写真を寄せてくださったのは、中野明さん（柴崎町1丁目）と佐治博さん（富士見町2丁目）。大の鉄道マニアであるお二人は、勇退が近い石灰石列車の姿を沿線の風景とともに記録していた。別れを惜しみつつ、労をねぎらう声。重責を果たした安堵感と一抹の寂しさを湛えた列車の表情。お二人と列車の間に、ファインダーを通じてそんなやりとりがうかがえる。八月十三日、午前十一時四十四分、奥多摩発。青梅線のひとつの歴史が幕を閉じた。

奥多摩で採れた石灰石は
南武線・浜川崎駅まで
運ばれていた。

4月、満開の桜を走りぬける。
古里ー鳩ノ巣間のこの場所は絶好の撮影ポイント。

長年の労をねぎらい、運転士たちによって
記念のヘッド・マークがつけられた。

奥多摩駅構内に入る石灰石列車。
石灰石を運び終え、今戻ってきたところ。

二俣尾から軍畑への鉄橋を渡る。ここもまた、
多くのマニアに親しまれた撮影地だった。

御嶽ー川井間。初夏、多摩川の渓谷をのぞんで。
清流と石灰石列車の"共演"ももう見られない。

宮ノ平駅構内。石灰石を積んだ列車と
運び終えた列車が、この駅ですれちがう。

地区	店名	住所	電話
錦町	Coffee Shop 遊香	錦町1-4-24	527-3840
錦町	ステーキの リブレ	錦町1-8-3	527-1630
錦町	和菓子処 ゆうき	錦町1-8-5	525-0780
錦町	美容室 アリス	錦町1-15-21	525-1100
錦町	うちのやプルマン	錦町1-18-7	524-9280
錦町	むぎばたけ	錦町2-1-1	526-0210
錦町	池田屋商店	錦町2-1-10	522-3731
錦町	美容室 赤い鳥	錦町2-1-10	528-2389
錦町	寿屋酒店	錦町2-1-13	522-3625
錦町	しゃぶしゃぶ・鍋料理 しゃぶりん	錦町2-1-33-3F	527-2228
錦町	TAPAS	錦町2-2-29	529-0733
錦町	振興信用組合 立川支店	錦町2-2-32	524-1471
錦町	三田花店	錦町2-5-23	524-4187
錦町	セガミ薬局	錦町2-7-8	525-9212
錦町	マルミヤスポーツ	錦町2-7-8	522-2912
錦町	アミューたちかわ（立川市民会館）	錦町3-3-20	526-1311(代)
錦町	そば 高尾亭	錦町5-5-31	522-2710
柴崎町	カフェ べる・こむーね	柴崎町2-2-7	529-7800
柴崎町	寿司由	柴崎町2-2-8	522-3733
柴崎町	関田酒店	柴崎町2-2-17	524-2960
柴崎町	ビストロすぎ浦	柴崎町2-2-23	525-9929
柴崎町	ラ・バンバ	柴崎町2-3-3	524-5800
柴崎町	クワトロ	柴崎町2-3-3	528-2983
柴崎町	キャノン01ショップ	柴崎町2-3-6	528-1501
柴崎町	コミュニティ・ストア はなむら	柴崎町2-3-9	522-2491
柴崎町	ユウ都市企画	柴崎町2-3-13	528-2566
柴崎町	コマツホーム	柴崎町2-4-6	525-5811
柴崎町	喫茶 キャリー	柴崎町2-4-7	528-2630

えくてびあんの輪

人がゐて、街があります。
あなたがゐて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも、えくてびあん！

今月は錦町・羽衣町・柴崎町(A)のお店です。

地区	店名	住所	電話
柴崎町	かみゆい処 わ	柴崎町2-4-8	522-8202
柴崎町	芹沢ガラス店	柴崎町2-4-8	522-3065
柴崎町	小室園	柴崎町2-4-8	522-2894
柴崎町	カフェレストラン ほまれ屋	柴崎町2-4-15	526-2232
柴崎町	ファッションハウス ほまれ屋	柴崎町2-4-15	525-2788
柴崎町	オーロール焼きたて 立川店	柴崎町2-4-15	527-9473
柴崎町	ぼだい樹	柴崎町2-4-18	528-0556
柴崎町	北京大飯店	柴崎町2-4-19	522-6393
柴崎町	ななや	柴崎町2-4-22	525-6980
柴崎町	田中星美堂薬局	柴崎町2-5-3	522-3913
柴崎町	菊川園	柴崎町2-5-6	526-2035
柴崎町	cafe コロラド	柴崎町2-5-8	526-2285
柴崎町	マエダ文具	柴崎町2-6-2	525-6584
柴崎町	スタジオ269	柴崎町2-8	527-0269
柴崎町	手造りのお弁当 くりや	柴崎町2-9-3	523-2590
柴崎町	立川高等技芸学院	柴崎町2-9-4	522-3424
柴崎町	食事処 GOSAN	柴崎町2-9-27	526-2200
柴崎町	石原薬局	柴崎町2-10-3	523-4067
羽衣町	洋菓子サロン ケーキスタジオ35	羽衣町2-6-1	527-6808
羽衣町	林歯科	羽衣町2-7-10	522-5657
羽衣町	中島豆腐店	羽衣町2-12-34	522-5732
羽衣町	珈琲屋 らうむ	羽衣町2-27-9	526-3643
羽衣町	和風レストラン 蔦屋	羽衣町2-27-14	526-3698
羽衣町	立川商店	羽衣町2-30	522-3565
羽衣町	泰明堂	羽衣町2-31-1	522-3353
羽衣町	おそのい時計店	羽衣町2-32-2	522-5211
羽衣町	文具の ないとう	羽衣町2-33-1	522-3677
羽衣町	赤松タバコ店	羽衣町2-42	524-7852

シリーズ この人と1時間⑭

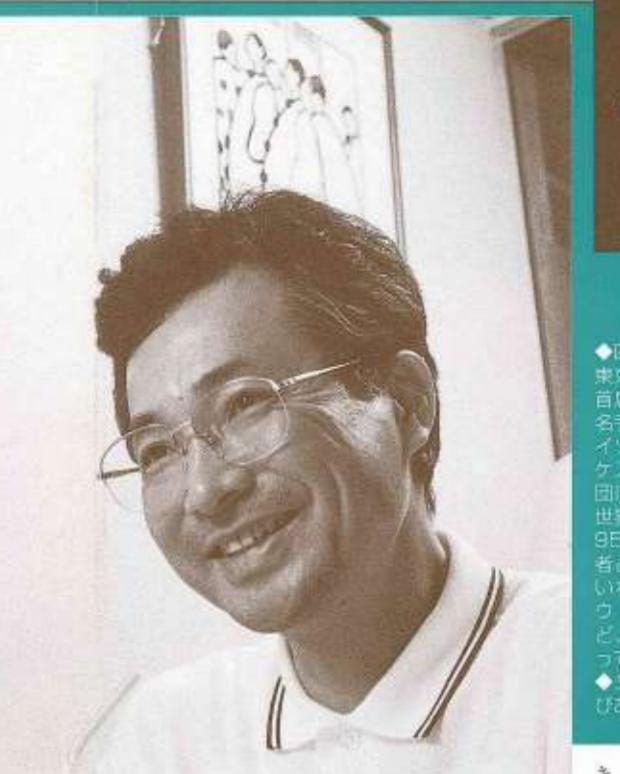
帰ってきた首席奏者

元ベルリン交響楽団首席クラリネット奏者

四戸世紀さん

▲年に一度、世界の第一線で活躍する管楽器の名手たちが立川に集う「スーパー木管アンサンブル」。今年は11月11日（水）、午後7時よりアミューたちかわ小ホールで開催される（写真最右が四戸さん）。

あの四戸世紀さんが、立川へ帰ってきた。ベルリン交響楽団のクラリネット首席奏者としての重責を果たしての帰国である。立川三中に在学している頃から音楽の才に目覚め、東京芸大へ進む頃からは、数々の幸運にも恵まれて、これ以上はないという音楽道を歩みはじめる。なかでも、恩師カール・ライスター氏の目にとまったことが、世界へはばたかせた契機となったという。

だが「音楽家」四戸世紀の深み、厚みが表現されるのは、むしろこれからであろう。えくてびあんで以前に一度インタビューを試みているが、無礼を顧みずに云わせてもらえば、今回の方が断然、人間としての深み、思慮が増してその魅力はあふれんばかりである。音楽家が技術を研くのは当然だが、それ以上に大切な「人間」を感じさせてくれた今回の対談であった。

〔プロフィール〕

◆四戸世紀（しのへせいき）：立川市生まれ。東京芸術大学在学中に、元ベルリン交響楽団首席奏者で世界的に知られるクラリネットの名手、カール・ライスター氏に見出され、ドイツに渡ったのが1974年。カラヤン・オーケストラ・アカデミーを経てベルリン交響楽団に入団。首席奏者を務め、「シノヘ」の名は世界中の音楽ファンの知られるところとなる。95年より読売交響楽団のクラリネット首席奏者として、また日本クラシック音楽の祖ともいわれる斎藤秀雄氏の志を受継ぐ「サイトウ・キネン・オーケストラ」にも参加するなど、国内外を問わず、精力的な演奏活動を行っている。錦町5丁目在住。

◆立井啓介（たていけいすけ）：月刊えくてびあん編集人。

立井 四戸さん、お帰りなさい。本当にお久しぶりです。

四戸 ごぶさたしています。

立井 結局ベルリンには、何年ぐらい住まわれたんですか。

四戸 えーと、二十四年です。

立井 四戸さんがベルリンで暮らしている間、世界の状況がガラリと変ったでしょう。冷戦が終って、ドイツも西と東が統合されたり。

四戸 実は、日本に帰ってきた大きな理由がそれなんです。ベルリンの壁がなくなって、統合されること自体は悪いことではないと思うんですが、何しろいきなりガラッと変わったでしょう。全く違う価値観が、突然一緒にされてしまったと云うか。河が流れていて、そこに突然違う色の水が流れこんできた、という感じで。

立井 日本にいると、そんな状況は想像もつきませんでした。

四戸 政治の怖さとでも云うのでしょうか、いわゆる非常事態ですから、何が起こってもおかしくないという状況は怖かったですね。特に僕たち外国人は不安でした。

立井 それで帰国を決意されたわけですか。

四戸 そうですね。自分の年齢から見て、これから演奏者として一番動けそうな時期に、何か制約のある中でやるのは嫌だなと思ったんですね。ちょうどその頃、日本の読売交響楽団の首席クラリネットが空いているという話を聞いたんです。それでオーディションを受けてみたら受かったんで、思いきって帰国を決めました。

立井 そうだったんですか。いかがですか、日本での演奏活動は。

四戸 ええ、今の時点では満足しています。それより普段の生活の部分で、まだ慣れてないんですよ。

立井 二十四年もドイツで暮らしていたわけですからねえ。実は今日は、音楽家の日常というのはどういうものなんだろうかということも伺いたいと思ってるんです。四戸さんは生まれも立川ですか。

四戸 そうです。錦町です。立川七小、中学校は三中です。その頃は夏休みになると、宿題もしないで毎日泳いでばっかりいましたよ、多摩川で（笑）。

立井 意外にわんぱくだったんですね（笑）。音楽を志すようになったのはいつ頃からですか。

四戸 三中時代、ブラスバンド部に入ってたんです。もう楽しくて、毎日放課後になるのが待ち遠しかったですね。その後、高校は（東京）芸大の付属高校に進んで、芸大に入るわけですけれども。

立井 さらに、あのベルリン交響楽団に入団されますよね。

四戸 芸大時代にカール・ライスターの公開レッスンを受けて、彼の前で吹く機会があったんです。そこで誘われたんですが、僕の場合、幸運中の幸運というか、ちょうどその時期、ベルリン・フィルにカラヤン財団というのが発足して、オーケストラ・アカデミーができたんです。そこで奨学生として入ることができたんですよ。

立井 学校みたいなものですか。

四戸 そうですね。一年半はレッスンだけなんですが、その後、ライスターがカラヤンの前で吹く機会を作ってくれたんです。そこでカラヤンも気に入ってくれてオーケストラに入るんです。

立井 それで首席奏者にまでなってしまった。いやあ、ここまでお話を伺っていると本当に幸運というか、これ以上はないくらいの道を辿られているように感じますね。もちろん四戸さんに実力があるから、そうなるべくしてなったんでしょうが。

四戸 自分でも本当に恵まれてるなあと思います。ただ、やっぱり結果がすべてのシビアな世界ですから、それを継続していくのは本当に厳しい。その厳しさは充分知っていますから、努力は怠れないです。でも、何より音楽が大好きですからね。

立井 演奏のレベルをキープし続けるのは大変なんでしょうね。でも、日常生活にはいろんな「雑用」が多いでしょう。

四戸 いやあ、ホントに雑用は多いですよね（笑）。でも僕の場合は、たとえば今夜演奏があるとする、そうすると何をやっていても自然と照準をそこに合わせているんです。こうして話をしていても、どんな雑用をやっていても、演奏にコンディションの照準を合わせている。最低限、そこに集中できるようにしてるんです。

立井 四戸さん、奥さまもバイオリニストでしたよね。ご夫妻で音楽家の場合、なお大変でしょう。

四戸 うちの場合は半々なんです。彼女も本当に優秀な演奏家ですから、音楽のことは尊重して考えてあげないと。娘が中学生なんですが、通っている学校がお弁当持参なんですよ。だから僕も作りますよ、お弁当（笑）。

立井 今、お嬢さんの話が出ましたが、中学生ということはドイツでの暮らしの方が長いわけですよね。日本の生活にとまどってるんじゃないですか。

四戸 生活スタイルが全く違いますからね、ちょっと可哀想な気もします。日本の街はゴミが多くて汚い、なんてプンプン怒ってます。だから我が家では「ウンベルト・ミニステリン」って呼ばれてて。

立井 え、ウンベルト…？

四戸 ドイツ語で「環境庁長官」という意味なんです（笑）。学校へは電車で通ってるんですが、向こうにいた時は、森の中を自転車で通っていたんですよ。でも、日本とドイツ、両方の本当の意味での文化を理解してもらえたらいいなと思ってるんです。

立井 以前インタビューした時に、ベルリンでは音楽や芝居がなぜ盛んなのか、といった話をした記憶があるんですが、僕も昔、パリに何年か住んでた時に、よくコメディー・フランセーズで芝居を観たんですね。それで芝居がはねた後にキャフェに繰り出すんですが、それが楽しい。皆で一緒に、今観た芝居についてワイワイ話し合う。

四戸 そうそう、うわあ懐かしいなあ（笑）。立川に帰ってきて、それが出来ないのが寂しいですね。僕もたとえばコンサートを観て、あまりに素晴らしい演奏だったら、そのまま家になんて帰れませんものね。感じたことを皆で丁丁発止（ちょうちょうはっし）とやりあってね。今思うと、そこで得たものというのは本当に大きいですよ。

立井 感じ方や表現の仕方を、そういう場にいることで自然に学べるということもありましたよね。

四戸 余韻にひたって次の日の糧（かて）にする、そんな感じでした。

立井 そうすると大きな違いというのは、日本にはキャフェのような存在、つまり「場所」がないという問題なんでしょうかねえ。

四戸 どうでしょう。日本は忙しすぎるのかな。

立井 でも四戸さんがいない間、日本人の休日は増えてるんですよ。

四戸 ドイツでは土曜の午後と日曜日は「ルーエターク」というんです。日本語で「静かな日」という意味なんですが、その日は当然仕事も学校も全部休み。お店も休み。文字通り「静かな」日なんですね。

立井 日本も確かに休日は増えましたが、悲しいことに「静か」ではない（笑）。

四戸 僕のような仕事をしていると、そういう日はとても大事なんですが、それを欲すると日本では努力が必要なんです。

立井 本当の豊かさは、そういう「静かな」時間を持てることなのかも知れませんね。

四戸 僕は演奏家ですから送り手なんですが、いろんなジャンルの音楽を聴くことも好きなんです。変な云い方ですが、生命に対してポジティブなもの、そんな力がある表現が大好きなんです。絵を見ることも好きですし。そういう受け手としての自分を作ってくれたのも、ベルリンの「静かな」時間だった気がするんですね。自分も演奏家として、そうありたいとも思いますし。

立井 ちょっと話は変わるんですが、富士見町に鈴木藤太郎さんという方がいるんです。ずっと農業をやってらして、今年で一〇一歳になられたんですが、何と今でも畑に出てるそうなんですよ。

四戸 わあ、それはすごい。

立井 お家の方に聞いたら、部屋にいる時は普通のお年寄りなんですが、畑に出て土に触れた途端、お顔が生き生きとして元気になっちゃうそうなんです。僕はそんな話を聞くといつも思うんですが、人間にとって重要なのは、何かひとつ「鉱脈」を見つけることなんじゃないかなと。

四戸 鉱脈ですか？

立井 藤太郎さんにとっては「土」であり、そして四戸さんにとっては、それが「音楽」ではないかと。

四戸 ああ、そうですね、まさに。カミさんにも云われるんですが、疲れた顔をしているなと思ってちょっと吹いて、いい音が出せたってなると全然顔が違ってるそうなんです。たぶん、その鉱脈を持つことによって、きっと何かが身体の中を流れているんでしょうね。

立井 ねえ、そんな感じがします。

四戸 僕は常々、芸術には人を元気づけたり、何かを浄化したりする力があると思っているんですが、鉱脈という言葉で考えると、それがとても理解できます。それに今、若い人の心が荒れているといわれてますけれど、何かひとつ鉱脈を見つければ、そんなにずれた方向には行かないんじゃないかとも思いますよね。

立井 どうぞ、これからも素晴らしい演奏を私たちに聴かせてください。

四戸 ありがとうございました。いやしかし、その藤太郎さん、素晴らしいですねえ……。

（9月1日 リーセントパーク・ホテルにて）

連載 四字熟語（15）

清風故人

涼しい風が吹いてきて、久し振りに旧友に会うような気持ち。「清風(せいふう)に故人来(きた)る」という。

清風とは、秋の爽やかな涼風のことで、故人とは、昔なじみ、古くからの友人の意で、死去した人をいうのではない。

酷暑の夏が過ぎ、秋になって心地よい風が吹いてくるのは、旧い友が訪れてくれたようだ、という意味。

真味百撰⑱

オランダヤ ハイネケン・フック

ハイネケン生ビールと150種類ものアルコールが愉しめるオランダ風レストランバー

曙町2-7-20 カメヤビル8F / 527-8045
11:30〜15:00、17:00〜23:30 / 年中無休（日祭日は22:30迄）

丸井
ハイネケン・フック カメヤビル8F
伊勢丹
さくら銀行
住友銀行
北口
立川駅(ルミネ)

店内奥へと歩を進めると、一画区切られ、オランダ風に設えられた室内に、ランプのオレンジの明かりの灯るカウンターバーがあらわれる。

落ち着いた雰囲気が保証されているこの店には、長年に亘るごひいきも多い。立川の大人たちのための空間を提供して、今年で21年目を数える。

とはいえ、敷居は決して高くないのが、この店の特徴だ。休日は映画帰りの家族連れが食事を楽しみ、平日の昼時には北口周辺のOLたちで賑わう。

というのも、週に2〜3度は市場へ赴いて旬の素材を選び、その時季いちばん美味しいものをメニューに加える、という具合にフードメニューにも力を注いでいるのだ。

この秋のお薦め料理は、秋鮭のチャンチャン焼き（700円）、里芋と小海老の揚げ出し（700円）、ホタテ貝のオーブン焼き（800円・以上写真）など。ランチタイム時には、肉・魚を選べる日替わりランチ（スープ・サラダ・コーヒー付・1000円）の他、8種のメニューが用意されている（800円〜）。

お酒のいける方には、ハイネケンの生を、まずは一杯注文してみることをお薦めする（480円〜）。他にもウイスキー、ワイン、カクテル等、どんな要望にも応えてくれる。

東風

日本人には妙な癖があって、変なところに「さん」を付ける。大学の連盟会議などで「中央大学さん」「明治大学さん」などと「さん」を付けるし、会社員同士でも「三菱商事さん」「東芝電気さん」といった具合である◆犯罪者に「さん」をつけるかどうか、時代にもよるが、あの帝銀事件で逮捕された平沢貞通は、はじめ「氏」付きで呼ばれていたのが、容疑が濃くなるにつれて呼び捨てになったそうである。ロッキード疑獄の時も田中角栄元首相と書くか、元首相田中角栄と書くかで随分とニュアンスが違う◆私たちはしばしば日常でひとを「呼び捨て」にするが、別に軽蔑している場合ではない時がある。夏目漱石を「夏目さん」とは云わない。谷崎潤一郎を「谷崎さん」とは云わない。漱石、潤一郎と呼び捨てにして尚、尊称の意を含んで込めている◆先月号の対談で内木文英さんが、坪田譲治、大石真、寺村輝夫、今西祐行と並居る文学者を軒並み「呼び捨て」にしている。また、われらが砂川昌平さんのことを「砂川昌平」と呼び捨てである。それでいながら万感の思いを込めて敬意を表しておられることが、対話をしているとびんびんと響いてくる。それを活字にしてしまうと、温かい内木文英さんの体温が冷めてしまいやしないかと、心配でたまらなくなっているところである。あれでよかったのであろうか◆月の座のひとりはえくてびあんの人

月刊 えくてびあん 第171号
平成十年十月一日発行
発行所 えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F 〒190-0012
電話 〇四二(528)0082
FAX 〇四二(528)0065
編集発行人 立井啓介
印刷所 ㈱大廣社

（表紙）陶芸「けんかのあとは…」可部美智子
（編集）池田隆男 小林康史 内藤裕子 名尾房真 山田恵子 大久保清志 新井紀美子
（写真）中村 伸 五来孝平

たみ子さんのうた

2

詩・清水たみ子

画・土井　鼎

月

月はどこかのこずえから、
夜はするするあげられる。
金の糸目をつけられて、
子どもが凧をあげるよに。

そしてどこかのこずえから、
明けがたするするたぐられる。

――おめめさませよ、町の子よ
お窓すれすれ通ってく。

詩集「かたつむりの詩」（かど創房刊）より